

ダブルワーク（半農半X）で農福連携

Home Base（三田市）



経緯

- 代表の畠一希さんは、2013年に県内JAに入組。営農相談員として働く中、高齢化や離農など地域の農業の課題を目の当たりにし、将来に向けて食や農を支え、地域を支えることが急務と考えるようになった。
- 日々の営農指導に携わるうちに、自らが後継者になりたいという思いが募り、三田市内で就農する。現在でもJA勤務を継続しながら、認定新規就農者となり、週3JA、週4農家として働くダブルワーク（半農半X）を実践している。
- 就農する前に兵庫県等が主催する農業経営者向けの農福連携研修会を受講していたことから、三田市とJAに福祉事業所とのマッチングを相談したところ、両者の働きかけにより、三田市内3カ所の福祉事業所と2021年の就農と同時に請負契約を締結する運びとなった。

取組内容

- 黒大豆枝豆3.3haと白菜1haを生産。黒大豆枝豆は7月収穫の早生種から10月収穫の丹波黒まで数種類を栽培。利用者は収穫、回収、運搬、残さ処理に従事。白菜は11月から2月に収穫し、利用者は回収、計測、積込作業に従事。
- 作業に当たっては、ジョブコーチ（福祉側の職員）に作業内容を丁寧に説明し、十分理解していただくことが重要。そうすることで、ジョブコーチから利用者へ作業内容の指示が的確に伝わり、作業の始まりから終了まで一貫してジョブコーチに任せることができる。
- 農福連携を取り組むに当たっては、利用者に作業スピードを求めたり、たくさんの指示を出したりせず、利用者のいろいろな特性等への理解と特性に応じた作業内容を委託すること。併せて、多様な人材が働く場所を提供しているという心構えが大事。

今後の展望等

- 暑い時期の作業は、兵庫県などの補助事業を通じて、空調服や水冷シャツ等を導入し、働きやすさの改善を図りたい。
- 福祉側に新たに、選別や袋詰め作業にも挑戦してもらい、事業所内でできる作業も創造し、多様な障害特性を考慮した作業委託を目指す。
- 所得向上や周年を通じた利用者の作業を確保したい。そのためには、6次産業化を目指し、加工品開発に取り組み、三田産黒枝豆、黒大豆の供給に注力する。